

1920 年代ロシアの自由主義経済学と農業問題

—— リトシェンコとブルツクス ——

小島修一（甲南大学）

I 報告の課題

本報告の課題は、1920 年代ロシアの自由主義経済学者が自国の農業発展をどのように見ていたのか、を明らかにすることにある。以下では、「自由主義（リベラル派）経済学者」という語を広くとって、法の支配のもとでの個人または企業の自由な経済活動と市場メカニズムの働きとを基本的に重視する経済学者、を指して用いる。

ロシアは、自由主義的伝統の弱い国であると言われる。しかしそのロシアにおいても、自由経済協会やゼムストヴォのような自由主義的な団体が早くから設立されていた。また 20 世紀初頭にはカデット（立憲民主党）と呼ばれる有力な自由主義政党が結成され、同党に所属する多くの経済学者の社会的活躍が見られた。彼らの成果は革命後も受け継がれ、市場メカニズムを用いて経済の復興をはかったネップ期には、当時ケインズも注目していたように、若い非党員のリベラル派経済学者たちによって農村市場や景気変動の研究が盛んに行われていた。

本報告は、これまでほとんど知られることのなかったロシアの自由主義経済学者の活動に光をあて、現代ロシアの市場移行という問題を念頭に置きながら、この国における「基層社会」と市場経済との歴史的関係の解明をめざすものである。ただしここでは、リトシェンコとブルツクスという、1920 年代ロシアを代表する二人の自由主義経済学者に考察を限定したい。なかでも農業問題に焦点を当て、彼らがロシアの農業発展をどのように捉えていたのかを、両者を比較しながら明らかにしようと思う。というのも農業問題は、帝政期から続く最大の経済問題であっただけではなく、ロシア農村の伝統的社会秩序の変容と絡む深刻な社会問題でもあったからである。

II リトシェンコとブルツクスの経歴及び業績（当日配布予定の「略年表」を参照）

(1) リトシェンコ L.N.Litoshenko (1886-1943)

リトシェンコは、1886 年に貴族の家系を引くゼムストヴォ職員の息子としてハリコフ県で生まれた。1909 年にモスクワ大学法学部経済学科を卒業後、経済学講座に残るが、1911 年文相の抑圧措置により同大学を去る。翌 1912 年モスクワ商科大学の助手に選ばれ、2 年間の外国留学に出た。

リトシェンコの主要関心は一貫して農業経済、特に農業市場に向けられていた。彼は、ストルイピン農業改革の支持者が多いハリコフ農業協会とつながりを持ち、改革期の行政機関にも協力していた。またカデット系の新聞に寄稿を続け、その編集を助けた。

しかしリトシェンコは革命後もロシアにとどまり、いくつかの政府機関で活躍することになる。すなわち、1918 年に中央統計局に入り、1920 年からはモスクワ農業大学の

教授と同大学付属農業経済研究所の研究員とを兼職している。さらに財務人民委員部においても、金融経済局の顧問や経済研究所の農業部長となった。こうした政府機関で彼が中心的役割を果たした主要研究プロジェクトには、ソ連全土の体系的な農民家計調査、ソ連経済の部門間バランスの作成、ソ連の国民所得の推計、の三つがある。

このような「官庁エコノミスト」としての活動と並んで、リトシェンコはアメリカの学者と特別な交流関係を持っていた。すなわち、ロシア革命に関する米ソの共同研究プロジェクトに基づき 1926-27 年にスタンフォード大学で研究を行っていたこと、またこれに関連してロシア・ソヴィエト農業を分析した二種類の草稿を書き、それらが同大学に残されていること、などである（特に第一草稿は、ボリシェヴィキの社会主義農政を体系的に批判する内容で、2001 年に初めて公開された）。

リトシェンコは当時また、有力なチャヤーノフ批判者としても知られていた。彼が兼職していたモスクワ農業大学の農業経済研究所は、チャヤーノフ率いる「組織・生産学派」の拠点となっていたが、彼はこの学派を自由主義の立場から批判し、論争を引き起こした。ところが 1930 年にリトシェンコは、「論敵」であった「組織・生産学派」の学者たちとともに、「勤労農民党」事件で逮捕される。彼はサラトフに追放後、1932 年にモスクワに帰って政府の研究所で働くことを許されるが、間もなく始まった「大粛正」の中で 1938 年に再び逮捕され、1943 年にラーゲリで亡くなっている。

(2) ブルツクス B.D.Brutskus (1874-1938)

ブルツクスは、1874 年にバルト海沿岸の小都市で、ユダヤ人家庭に生まれている。1898 年にワルシャワ近郊のノヴォ・アレクサンドリア農林大学を卒業後、ペテルブルクのユダヤ人植民協会で農学者として活動を始めた。

1907 年、ブルツクスはペテルブルク農業大学の講師となる。彼は当時、ロシアと西欧の農民経済の比較研究から独立自営農民が持つ競争力を解明し、こうした農民層を創り出すストルイピン改革を支持していた。また農民経済の独自性を強調する点で、彼は「組織・生産学派」に極めて近い立場にいた。

1917 年の 2 月革命後、ブルツクスは臨時政府と関係のあった中央土地委員会や農業改革連盟で積極的に活躍し、農村革命の破壊的影響に対して警鐘を鳴らした。また彼は、革命の中でユダヤ人が生き残る道を入植に求め、この問題についても積極的な発言を行っていた。

こうした農業改革・ユダヤ人入植の問題と並んで、革命期にブルツクスの関心を大きく捉えたのは社会主義経済の問題であった。彼は「戦時共産主義」を社会主義経済の「試み」と見て、1920 年の講演では「経済計算の衰退」という観点から社会主義経済の破綻を論じた。この講演は後に論文、さらに著書として公開され、同時期のミーゼスの問題提起と並ぶ先駆的な社会主義批判として今日、注目を集めている。

1921 年にブルツクスはペトログラード農業大学の学部長になるが、翌 1922 年にはボ

リシェヴィキ政府によって多くの知識人とともに国外追放され、亡命生活が始まる。彼はドイツに移り、1923 年にベルリンに創設されたロシア学術研究所の教授として、ソヴィエト経済、特に農業の研究に従事することになる。このベルリン時代は彼にとっては学問的に最も多産な時代であり、ドイツ語、ロシア語、イディッシュ語、ヘブライ語で農業経済学、ロシア農業史、ソヴィエト経済、ユダヤ人の経済状態などについて重要著作を相次いで発表している。

1930 年にソ連で多くの知識人・文化人への弾圧が始まるとブルツクスは抗議運動を組織し、また農業集団化の惨状をヨーロッパの世論に伝える仕事も当時行っていた。しかし 1932 年にロシア学術研究所が閉鎖されてからは、イエルサレムに移って大学で農業経済学や農政学の講義を行い、1938 年に病死している。死の直前、ブルツクスはハイエクに手紙を送り、また彼の英語論文集『ソヴィエト・ロシアにおける経済計画』（1935 年）にはハイエクの序文が寄せられている。

(3) 両者の比較

リトシェンコとブルツクスとの間には、世代体験、「組織・生産学派」との関係、ロシアの知的世界での位置などで大きな相違が見出される。しかしそれにもかかわらず、少なくとも次の三点において注目すべき共通点が見られる。

その第一は、ストルイビン農業改革の擁護である。この改革を支持することは、当時多くの知識人の間ではタブーに近いものがあったが、二人は改革を積極的に支持する議論を展開していた。

第二の共通点は、土地共同体とナロードニキ的思考に対する批判である。ロシアの農村研究者の間では 20 世紀に入ってもナロードニキ的思考が大きな影響力を持ち続けていたが、二人のロシア農業論ではポリシェヴィキに対するよりも、むしろナロードニキに対する批判が前面に強く押し出されている。

第三の共通点は、経済的自由主義の立場から社会主義経済を体系的に批判した点である。当時のロシアにおいて、この二人ほどはっきりと社会主義体制を批判した経済学者は少ない。

以上の三点から、リトシェンコとブルツクスは、ロシアの経済学者の中で自由主義の立場を最も鮮明に打ち出した学者であったと言えるであろう。

III リトシェンコのロシア農業論

農民経済の中には闘争している二つの原理がある、というのがリトシェンコの基本認識であった。一つは「自然発生的・有機的原理」であり、農家の消費需要充足と生活保障のために共同体から土地分与を求める「消費者の魂」である。もう一つは「合理的・経済的原理」であり、資本蓄積や蓄財をめざす「経営主の魂」である。彼は、チャヤノフたちが前者の原理しか見ていない点を批判し、農民の中にある後者の原理を支援す

る必要性を説く。

リトシェンコによると、ロシア農業ではこれまで「消費者の魂」が支配的であり、土地共同体が次のような「盲目的進化」に貢献したきた。すなわち、共同体の土地分与による生活保障は農家人口の増加をもたらし、それはまた世帯分割を促して経営数の増加と経営規模の縮小をもたらす。その結果、農民経済の水平化と生活水準の全般的低下、つまり貧困の平等化が生じ、工業発展は大きく阻害される。この工業の停滞がまた農村での人口滞留をもたらし、土地分与要求を一層高める。さらに、人口圧のもとで家族労働の強化を代償として増加する、農民の地主地取得は、ロシアを「巨大な農民国家」に変えつつある。これはリトシェンコの言葉によると、「中国の運命」に他ならない。

この悪循環を断ちきるには共同体の解体が不可欠である、と彼は考える。たしかに、それをめざしたストルイビン改革の政治的・社会的リスクは大きい。しかし改革は、すぐれた経営主への土地集中と生産性の向上、国内穀物市場の発展、農産物輸出の増大などの「経済的進歩」を生み出した。さらに第一次大戦は、農民の経済的分化、過剰労働力の吸収、商品流通の増大などをもたらした。総じて改革と戦争は、農民の中にある「経営主の魂」を刺激し農民を「盲目的進化」から「進歩」へと軌道を転換させた、とリトシェンコは評価する。

ところが革命が、この「進歩」のプロセスを逆転させた。リトシェンコによると、1917-18年の農村革命（共同体単位での農民による自生的な地主地収奪と分割）は貧困の平等化を、またボリシェヴキの「戦時共産主義」政策は穀物余剰の激減をもたらし、全体として農民経済の実物自給化が進み「50年前」の状態に戻ったという。

しかしリトシェンコは、新しく生まれたネップの枠組に期待を寄せ、この枠組の中では穀物余剰→商品化率→農民の購買力によって規定される農村市場の規模が国民経済にとって決定的に重要であると考えた。したがって穀物余剰を大量に生産できる大農経営を育成するために、彼は土地流動化・土地所有権の確立・減税・取引の自由などの改革提案を1922年には行っていた。

ところが1927年になるとリトシェンコは、政府は穀物余剰に依拠した工業発展を期待しながらも、他方では大農を抑制し「一種の小農心理」を作り出すという、矛盾した政策をとっていると批判するようになる。経済成長をはかるには農民分化という「自然な傾向」に政策を調和させなければならない、というのが彼の判断であった。

IV ブルツクスのロシア農業論

帝政末期ロシアの農村研究者の間で支配的な見解は、「土地不足」が農民の貧困の主因であるので地主地を収容し、これを農民に「追加分与」すれば問題は基本的に解決される、というものであった。ブルツクスはこの「土地不足」論を実証的に批判し、自給経済を理想化する「実物経済的観念」がそこに前提されていることを明らかにする。さら

に、この観念の中心にある「土地への権利」を保障する制度こそが共同体であったと見て、彼は共同体の批判的検討に進む。

共同体の弊害として彼は、私的イニシアティブの成長の阻害、農業技術上の欠陥などを指摘するが、最重視するのは共同体の人口増加促進機能である。「実物経済的観念」と不可分な共同体は、人口増加を促し恒常的に「土地不足」と土地の細分化を作り出していくと彼は言う。

ブルツクスはこの袋小路からの出口を、「国民経済の深化」に求める。彼によると、ロシアの農業危機の本質は、国民経済全体の発展の遅れから来る農村過剰人口の問題にある。過剰人口を解消するには、工業化のテンポを引き上げ、農村の市場化を進めることによって、土地からの農民分離をはからなければならない。工業化はまた大量の労働力需要と農産物需要とを生み出し、ロシア農業を市場経済により適合した構造に改造していくであろうというのである。

この工業化・市場化に適合した農業の担い手として、ブルツクスは土地私有制の上に立つ独立自営農民を考えていた。彼は、資本主義的大経営・共同体農民と比較した自営農民の経営上の強さやメリットを明らかにし、自営農民が持つ人口抑制機能にも注目している。まさにこの自営農民層を創り出すのが、ストルイピン改革であった。

ブルツクスは、この改革を国民経済の発展に対応するものとする。彼がそう考えるのは、自営農民は農業余剰と工業製品への国内市場とを作り出し、移住政策は農村過剰人口の受け皿を作り、土地整理は私的イニシアティブの發揮に不可欠な条件となり、また土地流動化は需要に応じた土地供給を生み出すからであった。

したがってブルツクスは、1917 年におこった共同体農民の農村革命には、「国民経済の基本的利益」という見地から反対した。事実彼は、この農村革命による農業の崩壊とポリシェヴィキの社会主義農政の中に 1921-22 年の大飢饉の原因を見出している。そしてこの共同体と社会主義の「失敗」がロシア社会の進路を大きく変えた、というのがブルツクスの見方であった。すなわち、ネップによる市場の復活は農民イニシアティブの解放をもたらし、農民経営の復興が再びロシア農業の市場的展開を推し進めるであろう、と彼は当時予測していた。

ところが実際はこの予測に反して、1920 年代後半には政府の市場抑圧政策が進み、1929 年末からは全面的な農業集団化が開始される。ブルツクスは、この集団化運動の中で作られたコルホーズを、共同体とも協同組合とも従来型のコルホーズとも異なる全くユニークな組織と見ていた。そのうえで彼は、工業化のための農産物調達を当面の目的とする集団化体制は、農村部では 1932-33 年の大飢饉や畜産と労働市場の崩壊をもたらしながらも、行政的強制（例えばラーゲリ）や経済的現実への譲歩（例えば個人副業経営）などによって維持されている、と考えていた。

V 終わりに

以上見てきたように、リトシェンコとブルツクスは基本的な点において、ほぼ共通の認識を持っていた。すなわち、共同体と農村過剰人口との関係に大きな注目を払い共同体解体と農民分化を求めていたこと、農民の中にある経済的インセンティブや経営者機能の発展を重視していたこと、農工の市場的連関という国民経済的視点に立って農業問題の解決を考えていたこと、「戦時共産主義」を社会主義の「試み」として捉え、そこに経済計算や経営動機の衰退を見ていたこと、革命後も経済成長という見地からリベラルな改革の可能性に期待を寄せていたこと、などがその主な内容である。

だが結果として、彼らの生存中はロシアの市場経済への移行は中断してしまった。その意味で、彼らの自由主義的な見通しは実現しなかったと言える。そこで少し視点を変えて、この国の市場移行の困難性という問題を彼らはどのように考えていたのか、特に伝統的な社会秩序の中にいかなる障害を見出していたのか、を当日は最後に報告したい。この問題は、ロシアの市場移行という「プロジェクト」を歴史的展望の中で考える際、避けては通れない問題である。